“His Idle Time Not Idly Spent”:
ヘンリー・ウォットンの釣魚詩における時間の問題

横山　竜一郎

初期近代イギリスにおける釣魚文化の空前の発展は、1653 年にアイザック・ウォルトン（Izaak Walton）が記念碑的著作『釣魚大全』（*The Compleat Angler*）を出版したことでよく知られている。しかし、この作品の冒頭に付されたジョン・オフリー（John Offley）宛ての献辞において、ウォルトンが自らを「無学な釣り人」（“the unlearned Angler” A3v）と称し、釣りについて著すのに最も適任なイギリス人としてヘンリー・ウォットン（Henry Wotton）の名前を挙げていたことはそれほど知られていない。[1] 共に釣りに出かける間柄でもあったウォットンについて、ウォルトンは『釣魚大全』の釣り師に以下のように語らせている。

> . . . this man was also a most dear lover, and a frequent practiser of the Art of Angling; of which he would say, *’T was an imployment for his idle time, which was not idly spent*: for Angling was after tedious Study, *a rest to his mind, a chearer of his spirits, a diverter of sadness, a calmer of unquiet thoughts, a moderator of passions, a procurer of contentedness*; and *that it begat habits of* peace *and* patience *in those that profess’d* and practis’d it.
>
> (Walton and Cotton 53)

この釣り師による言葉は作者であるウォルトンの言葉でもある。事実、ウォットンの死後、ウォルトンは「サー・ヘンリー・ウォットン伝」（“The Life of Sir Henry Wotton”; 以下、「ウォットン伝」と略記）で次のように述べている—

[1] 『釣魚大全』はウォルトンの存命中に第五版まで出版され、版を重ねるごとに加筆修正されているため、本稿で『釣魚大全』を引用する際には、原則として初版を使用し、それ以降の版を用いる際には括弧内に頁番号と共に版を付記する。作中の詩を引用する際には頁番号と行番号を併記する。引用部分の日本語訳は、第五版を底本とする飯田操による訳書も部分的に参考にした。

— “Nor did he forget his innate pleasure of Angling, which he would usually call, “his idle time not idly spent;” saying often, “he would rather live five *May* months than forty *Decembers*” c6r）。撞着語法的に “idle” と “idly” とを並置した「無駄に費やされることのない無為の時間」（“his idle time not idly spent”）というアフォリズム風の表現が『釣魚大全』と「ウォットン伝」とで繰り返し引用されている事実は、少なくともウォルトンにとって、それがウォットンにとって釣りの時間がどのようなものであったかを伝えるのに適切な表現であったことを示している。

「無駄に費やされることのない無為の時間」について、「ウォットン伝」を宗教史の観点から分析した曽村充利は、「釣りの時間を ‘idle’ と述べているのは、ピューリタンを形容するときによく使われた ‘busy’ と対立する」と指摘し、伝記の反ピューリタニズム的性格を論じている（198）。内乱の時代という執筆年代を考慮するならば、ウォルトンのテクストが表象するウォットンの釣りの時間は、清教徒の勢力に対する抵抗の言説の一部としても理解できるだろう。だが、『釣魚大全』では、先の引用の後に、個人的経験に基づくとされるウォットンの詩が置かれていることを考えると、「無為の時間」はその詩との関係で第一に検討する必要がある。そうすることで、ウォットンの釣りの時間が、ある種の政治的プロパガンダとして作用する以前に、彼自身にとっていかなる意味を有していたかを知ることができるだろう。1651 年に死後出版された『ウォットン遺稿集』（*Reliquiae Wottonianae*）では「岸辺にて、座って釣りをしながら—春の描写」（“On a Bank as I Sat a Fishing: A Description of the Spring”; 以下、「岸辺にて」と略記）と題されるこの詩は、これまでの先行研究においてほとんど注目されることがなく、初期近代イギリス釣魚文学を扱った最新の成果であるマイラ・E・ライト（Myra E. Wright）による著作でも、詩の一節と「無駄に費やされることのない無為の時間」という表現とが並べて引用されてはいるものの、詳細には分析されていない（49）。[2] 本稿では、ウォットンが特別な意識を抱いていたという釣りの時間がどのようなものであったかを考察するために、「岸辺にて」における時間の問題を論じる。伝記主義的立場による批評がなされてきたように、この詩にはウォットンの伝記的背景が見出されるが、この観点からさらに議論を敷衍して、本論

[2] 『ウォットン遺稿集』には、ウォットンの詩に加えてウォットンの原稿に残っていた他の作者によるものと思われる詩が掲載されており、そこには「田園のレクリエーションの描写」（“A Description of the Countrey’s *Recreations*”）という釣魚詩も存在する。本稿では、この詩はウォットンの作品には含めない。

では、詩における時間経過の表現がウォットン自身の老いの感覚と連動していることを指摘する。また、釣りの時間がどのように経験されたかについて、これまで十分には参照されていなかった同時代の釣り言説、特に『釣魚大全』の記述と詩の表現との比較を通して、初期近代イギリスで釣りが瞑想的なレクリエーションとして価値づけられたことと結びつけて論じる。これらの議論によって、本稿は、ウォットンの釣魚詩が、詩人の私的経験と同時代の釣魚文化とを同時に反映した意義深いテクストとして評価できることを主張する。

時間は経過する——時制と若さ／老い

「岸辺にて」には、奇妙な時間が流れている。タイトルが示すように、この詩では釣りに興じる語り手の視点で春の情景が描かれるが、それは語り手が岸辺に「座っていた」（“sat”）ときの、すなわち、過去の描写である。それゆえ、詩の冒頭で生気に満ちた花鳥風月が詠われる際も、詩人は “all *Nature* seem’d in *Love*” (line 1) と、過去形を用いている。詩の時制は、しかしながら、以下の箇所で突如として転換を迎える。

> *Jone* takes her neat-rub’d paile, and now
> She trips to milk the Sand-red *Cow*;
> Where, for some sturdy foot-ball *Swaine*,
> *Jone* strokes a *sillibub*, or twaine. (lines 16–19)

詩において唯一、この 4 行では現在形が用いられている。その結果、この詩には過去時制と現在時制とが混在していることになるのである。抒情詩における過去時制から現在時制への変化は、ジョナサン・カラー（Jonathan Culler）が指摘しているように、まず過去の出来事を語り、後に現在形でその出来事の重要性を省察するという展開を取ることが多い（285）。少なくとも、時制が変化する前後では、語られる内容や語りの態度に何らかの変化が生じるのが通常である。あるいは、4 行のヴァース・パラグラフの現在時制は、一種の歴史的現在としても考えられるかもしれない。いずれにせよ、詩における奇妙な時間を説明するには、問題の 4 行が強調されて然るべき内容を語っていることが前提となるが、この詩が奇妙なのは、時制が変わった詩行でも——少なくとも表面上では——目立った変化が起こることなく、釣り人が見るような光景を語っている点にある。実際、乳搾りの女、乳牛、シラバブといったイメージは、典型的な釣りの風景の一部であり、『釣魚大全』にも登場する。

釣り師が旅人（第二版以降では狩猟家）に釣りを教えた後、二人が帰り道の草原で出会った乳搾りの母娘に余った魚を与えると、乳搾りの母は次のように感謝の言葉を述べる。[3]

> . . . if you come this way a fishing two months hence, a grace of God Ile give you a Sillibub of new Verjuice, in a new made Hay-cock, and my *Maudlin* shal sing you one of her best *Ballads*, for she and I both love all *Anglers*, they be such honest, civil, quiet men; in the mean time, will you drink a draught of *Red Cowes milk*, you shall have it freely. (2nd ed., 106)

「岸辺にて」が一貫して釣り師の視点から春の風景を描いているならば、ウォットンはなぜ異なる二つの時制を混在させたのだろうか。

この問いを考えるうえでまず注目すべきなのは、計 24 行から成る詩のうち、現在時制が用いられるのはわずか 4 行に過ぎないということである。こうして過去時制を前景化することで、詩人は春の様子を描いているだけでなく、その春の様子は既に過去のものとなって現在には存在していないことを暗示している。この暗示は、詩を伝記的な文脈に置くことでより明白なものとなる。『釣魚大全』の記述によれば、ウォットンが「岸辺にて」を書いたのは「ある夏の夕暮れに静かに岸辺に座って釣りをしていたとき」（“as he sate quietly in a Summers evening on a bank a fishing” 34）に、春のことを思い出してのことであったという。この証言が正しければ、春を描写した詩のほとんどが過去時制で語られていることは理解できる。ウォルトンの注釈は、しかしながら、時間の謎をさらに深めることにもなる。過去の描写をしているにもかかわらず、なぜ現在時制の詩行を組み込んだのか。この問いを考えるためには、詩の他の部分と異なる 4 行に描かれた内容を詳しく検討する必要がある。

問題となる詩行は、乳搾りの娘を描写したものである。乳搾りをする女性は『釣魚大全』にも登場するが、両者にはいくつかの違いが見られる。ひとつは、詩ではジョーンという名の女がひとりで乳を搾っているのに対して、『釣魚大全』では母と娘の二人になっているという点である。この母娘と最初に出会ったときの様子を、釣り師は次のように述懐する。

---

[3] 『釣魚大全』の物語は、初版では釣り師と旅人とのやり取りで展開されるが、第二版以降では旅人が狩猟家に変更され、第一章では釣り師と狩猟家と鷹師がそれぞれのレクリエーションの持つ美点を説明するという形になっている。ただし、第一章の途中以降は鷹師が登場しなくなるため、旅人（狩猟家）が釣り師の弟子として釣りを教わるという基本構造は変わらない。

> . . . ’twas a handsome Milk-maid, that had cast away all care, and sung like a Nightingale; her voice was good, and the Ditty fitted for it; ’twas that smooth Song which was made by Kit Marlow, now at least fifty years ago; and the Milk-maids mother sung an answer to it, which was made by Sir Walter Raleigh in his yonger dayes. (63–64)

釣り師が言及しているマーロウとローリーの詩は、いずれもパストラル風の恋愛詩である。ただし、前者が “Come live with me, and be my love” (66; lines 1–4) と陽気なトーンで始まり、活気に溢れた自然の姿を列挙するのに対して、返歌となる後者はそのような恋の価値に懐疑的な態度を取っている。

> If all the world and love were young,
> And truth in every Shepherds tongue?
> These pretty pleasures might me move,
> To live with thee, and be thy love. (67; lines 1–4)

マーロウの詩の語り手の想いが成就するのは、世界の自然物が常に若さを保ち、恋愛もまたそのようにあり続けるという反実仮想の条件下においてのみである。それゆえローリーの詩の続くスタンザでは、時の流れによって万物がみな破壊される無常が嘆かれ、若さによる喜びも束の間のものでしかないことが主張される。

二つの詩が成す対照は若さと老いの感覚と関係している。『釣魚大全』においては、興味深いことに、前者の詩が娘によって、後者の詩が母によって、それぞれ分担されて歌われる。乳搾りの母は、マーロウの詩を「自分の黄金時代の年齢、娘と同じくらいの年齢で」（“in my golden age, when I was about the age of my daughter”）に覚えたが、「二、三年ほど前に」（“two or three years ago”）覚えたローリーの詩の方が「自分にはよく合う」（“fits me best”）のだと説明している（65）。若さを満喫する歌は娘のような若い少女に相応しく、それとは反対に時の流れを憂うる詩が自分には相応しいと述べる母の言葉は、彼女が老いを実感していることの証左である。それを強調するかのように、第二版では、乳搾りの母がローリーの詩を覚えた時期に「此の世の気苦労が私を捕らえはじめた」（“the cares of the world began to take hold of me” 107）という文言が追記されている。彼女が感じる気苦労は、釣り師にとっては乳搾りの娘が「退ける」（“cast away” 63）であろうと考えるものである。狩猟家も同様に、 “they [milkmaids] are not troubled with cares, but sing sweetly all the day, and sleep securely all the night; and without doubt, honest innocent pretty Maudlin does so” (2nd ed., 109) と、乳搾りの娘が気苦労とは無縁であると想像している。

年齢を重ねることで気苦労を感じるようになるという現象は、乳搾りの女性に限られたものではない。『釣魚大全』第五版での加筆で、“a handsome Milk-maid, that had cast away all care” (63) という、初版での簡潔な言葉は、“a handsom milk-maid that had not yet attain'd so much age and wisdom as to load her mind with any fears of many things that will never be (as too many men too often do) but she cast away” (79) という表現に書き換えられ、ほとんどの人が加齢と共に気苦労を増すことが挿入句内で示されている。ここで、「岸辺にて」を伝記的に読もうとする読者は、この詩をウォットンが書いたのが、『釣魚大全』によれば、「70 歳を過ぎた」（“beyond seventy years of age” 34）ときであったことに留意する必要がある。彼もまた、乳搾りの母が、ひいては、ローリーの詩の語り手が感じる時の流れを経験していたのかもしれないのである。果たせるかな、晩年のウォットンは、伝記的事実を見る限りでは、此の世的な気苦労から無縁というわけではなかった。詩が書かれたと推定される 1638–39 年に到達する直前の 1637 年 10 月、ウォットンは遺書を書いたほどの重病にかかっている（Smith 1:214–19）。彼が亡くなったのは 1639 年なので、この詩は死を間近に控える年齢に達してから作られたことになる。

ウォットンの老齢を踏まえて「岸辺にて」の細部を分析すると、このテクストにも若さと老いの感覚が充溢していることが分かる。先に指摘したように、現在時制で語られる 4 行において、乳搾りの母は登場せずに娘だけが描かれる。この事態は、『釣魚大全』に描かれるような乳搾りの母娘の生活を知っている読者から見ると、乳搾りの母が排除された場面が恣意的に選択されているということでもある。娘との対比で老いを想起させる母が不在となることで演出されるのは、老いの隠蔽と若さの前景化である。娘が乳搾りに向かう様子を表す「軽快に歩む」（“trips” line 16）という動詞は、健康的な彼女の若さを特徴づけるのに寄与している。彼女の軽快な足取りの理由は年齢的なものだけではない。乳搾りを終えてから「フットボールに興じる逞しい青年に、／一杯か二杯シラバブを泡立ててやる」（“for some sturdy foot-ball *Swaine*, / *Jone* strokes a *sillibub*, or twaine” lines 17–18）からでもある。彼女が会いに行く男性は、「青年」（“*Swaine*”）という名詞で提示されるが、この語には、若い男性という意味に加えて、羊飼いなどの田園に住む男性、さらに転じて、パストラル詩における男性の恋人という意味を含んでいる（“Swain,” def. †3, 4, 5）。すなわち、乳搾りの女性は、マーロウの詩に代表されるようなパストラル風恋愛詩が推奨する恋愛の実践者として、若さを謳歌しているのである。読みようによっては、これらの詩行に、ジョン・ダン（John Donne）が「餌」（“The Bait”）と題された詩において“Come live with me, and be my love, / And

we shall some new pleasures prove" (lines 1–2) とマーロウの詩をエロティックに改変したように、性的な意味を読み取ることもできるかもしれない。[4] 初期近代ヨーロッパの言説において、一方では無垢なる処女性を、他方ではエロティシズムを付与されていた乳搾りの娘という表象を、どの程度この詩と関連づけるにせよ、乳搾り娘とフットボール青年の描写が、その直後に、伝統的な恋愛詩を想起させる描写へと連続的につながることは確かである。

> The *Fields* and *Gardens* were beset
> With *Tulip*, *Crocus*, *Violet*.
> And now, though late, the *Modest Rose*
> Did more then halfe a blush disclose. (lines 19–22)

春に咲く花、なかでもバラは、"*Modest*" という形容詞や "blush" という名詞の使用を通して擬人化され、恋する乙女と重ねられている。これらは明らかにカルペ・ディエムの伝統的なイメージであり、直前の乳搾り娘の女性としての若さを強調するはたらきをしている。

二人の慕情を暗示している現在時制の 4 行に若さの感覚が漲っていることを考えるなら、この 4 行で描かれる光景に語り手が、すなわち、老人のウォットンが存在していないことはきわめて大きな意義を持つ。乳搾りの女性が生活する空間は釣り人にとって日常的なものであったとはいえ、『釣魚大全』でも釣り師たちがある程度の距離を歩いて乳搾りの母娘に出会うように、その空間は釣りをする川辺といくらか地理的に離れていた。釣りをしながら詩を詠んでいる語り手も、遠くから、場合によっては肉眼では見えないところの、乳搾り娘を描いているはずである。だとすると、若さを象徴する現在時制の 4 行は、詩人が釣り糸を垂らす行と対立的関係を構築し、間接的に語り手の老いを表現しているのかもしれない。

たしかに、語り手の周囲でも恋愛の雰囲気が演出されていないわけではない。冒頭の四行は典型的な恋愛詩の牧歌風景である。

> And now all *Nature* seem'd in *Love*,
> The lusty *Sap* bagan to move;
> New *Juice* did stirre th'embracing *Vines*;
> And *Birds* had drawne their *Valentines* . . . (lines 1–4)

---

[4] ダンの「餌」は『釣魚大全』にも引用されているが、それは乳搾りの母娘の場面とは別の箇所においてである（184–86）。

豊穣と同時に性愛を示唆するこの光景のなかで語り手とその友人は釣りをしている。

> The *jealous Trout*, that low did lie,
> Rose at a wel-dissembled *Flie*:
> There stood my friend, with patient Skill
> Attending of his trembling *quill*. (lines 5–8)

『釣魚大全』において、釣りは学ぶ価値のある術（art）なのかと尋ねられた釣り師が "is it not an Art to deceive a *Trout* with an artificial Flie? A *Trout*!" (5th ed., 24) と主張するように、鱒は容易に釣ることのできない用心深い魚であった。その鱒が釣られる描写は、ひとつには語り手の友人の熟練した腕を示すものであるが、同時に、餌に——それも人工の擬似餌に——気を取られて鉤を認識できない鱒の盲目性を暗示するものでもある。そして、初期近代の釣魚詩においてこの盲目性は恋の盲目性と結びつけられ、しばしば恋愛詩の題材になったことを考えれば、釣りの場面においても恋愛の、ひいては、若さの感覚を読み取ることは不可能ではない。[5] しかし、この場面でも、語り手にかんしては若さの感覚が与えられていないように思われる。なぜなら、この詩が釣魚詩であるにもかかわらず、そして、隣には今にも魚を釣り上げんとしている友人が立っているにもかかわらず、語り手は魚を釣ることなく座ったままでいるからである。この語り手を老人のウォットンと重ねて考えたとき、魚を釣ることができないという事態は、釣果がないこと以上の意味を持つだろう。多くの批評家が認めてきたように、語り手の隣にいる友人がウォルトンであるならば、二人の間には実に 25 もの年齢差があることになる。[6] 乳搾

---

[5] 例えば、ダンの「餌」では、美しい女性が餌に喩えられ、惚れた男性たちが「恋に落ちた魚」（"th'enamoured fish" line 7）に喩えられる。性別が反転している例としては、イザベラ・ホイットニー（Isabella Whitney）の「著者からすべての若き淑女への、そしてすべての恋する乙女への勧告」（"The Admonition by the Auctor, to All Yong Gentilwomen: And to Al Other Maids Being in Loue"）と題された詩が挙げられる。この詩においてホイットニーは、"Beware of fayre and painted talke, / beware of flattering tonges" (A6r）や "Trust not a man at the fyrst sight, / but trye him well before" (A6v) と恋愛指南を行い、その喩え話として、愚かにも餌に食いついた魚と賢く騙されなかった魚について語る。この詩をより詳しく論じたものとして、Wright 1–2, 16–18 も参照。

[6] 詩における友人がウォルトンであるという考えについては、例えば、Hannah 34; Zouch xii を参照。その場合、この詩の舞台はウォットンがしばしば友人と釣りをしていたというテムズ川のブラック・ポッツ島（Black Pots Ait）である可能性が高い。ウォットンが 1624 年以降に学長を務めていたイートン・カレッジについての歴史を著したヘンリー・マクス

り娘やフットボール青年だけでなく、隣に立つ友人も、「絡まり合う」（“embracing” line 3）——この語は「抱きしめ合う」という意味でもある——蔓も、バレンタインの準備を済ませた鳥も、「慎重な」（“*jealous*” line 5）——この語は好色や多情な性質も表す（“Jealous,” def. †2）——鱒も、軒先に「泥でつくられた巣」（“daubed nest” line 10）を構えて子育てをする燕も、「喜び勇んだ歌声」（“triumphing *voyce*” line 12）を響かせるナイチンゲールも、「自然がみな恋しているように思われた」（“all *Nature* seem’d in *Love*” line 1）状態にあって若さと結びつけられているなかで、ただひとりそれらに参与することなく客観的に観察する立場に置かれているウォットンは、老いによって若さの時間から疎外された状態にあるのではないか。

むろん、人の意思とは関係なく経過する時間は、ウォットンだけに訪れるわけではない。詩において最も青春を楽しんでいるように思える乳搾りの娘さえ、その時間の流れに抗うことはできない。『釣魚大全』では、歌い終えた乳搾りの娘に対して、旅人がトマス・オーヴァーベリー（Thomas Overbury）の言葉を引用して “*That she may dye in the Spring, and have good store of flowers stuck round about her winding sheet*” (67) と述べることで、彼女もいつかは死ぬ運命にあることを思い出させている。[7] さらに、釣り師は乳搾りの娘の美声をナイチンゲールの鳴き声に喩えるが、乳搾りの母が歌うローリーの詩は、

> But time drives flocks from field to fold;
> When rivers rage and rocks grow cold,
> And Philomel becometh dumb,
> The Rest complains of cares to come. (67–68; lines 5–8)

と嘆息して、その美声も最終的には消えることを忠告する。[8] このことを考えれば、「岸辺にて」での、 “The *Groves* already did rejoyce / In *Philomels* triumphing *voyce*” (lines 11–12) という詩行も、いずれ訪れる死の予兆としての意味を持ちはじめる。しかし、ナイチンゲールよりも明白に死を思い出させ

ウェル＝ライト（Henry Maxwell Lyte）は、ウォットンがウォルトンと共にブラック・ポッツ島に訪れていたことを述べている（210–11）。この場所が作品の舞台であると主張する評も存在している（Ward 155–56）。

[7] オーヴァーベリーの「美しく幸せな乳搾りの娘」（“A fayre and happy Milke-mayd”）についての特質短描での該当箇所は、『釣魚大全』での記述とは微妙に異なる—— “She may dye in the Spring time, to haue store of flowers stuck vpon her winding sheete.” (K5v)

[8] 『釣魚大全』第五版では、「安息の心」（“The Rest”）が「老齢」（“age”）という語へと書き換えられ、時間の経過がより強調されている（83）。

る装置となっているのは、一方ではカルペ・ディエムの詩的イメージとして機能していた花である。カルペ・ディエムと表裏一体を成すメメント・モリの道具として、花は、他方では命の儚さを教える役割を伝統的に担ってきた。だからこそ、『釣魚大全』においてフライフィッシングの方法を説明し終えた釣り師は、旅人に雨上がりの草地を見るようにと促し、そこに咲く花を見つめながらジョージ・ハーバート（George Herbert）による「美徳」（“Vertue”）と題された抒情詩を誦じる。

> Sweet Spring, ful of sweet days & roses,
> A box where sweets compacted lie;
> My Musick shewes you have your closes,
> and all must die. (119; lines 9–12)

春の到来によって草原や庭園に美しい花が咲き誇るのを喜んで描写するウォットンの詩の語り手も、どこかで『釣魚大全』の釣り詩と同じような無常観を共有していただろう。

とはいえ、「岸辺にて」においては、経過する時間のなかで最も死に近いのがウォットンであり、彼と対照的に最も生を満喫している人物が乳搾り娘であることは間違いない。この詩が春の描写を過去時制で語っているのは、ゆえに、実際に春が過ぎたのと同時に、老いた彼にとっての精神的な春、すなわち、青春もまた過ぎ去ったものであることをも暗示する。ならば詩の奇妙な時間にはひとつの答えが出る。彼とはちがって若い時期を過ごしている乳搾り娘が生きる春の時は、過去時制とは異なる現在時制でなければならないのである。

時間を経験する——瞑想的レクリエーションとしての釣り

釣りの時間に与えられた価値について、より広い視点からその歴史的発展に注目しようとするとき、『釣魚大全』においてハーバートの詩が引用されることは、さらに重要な意味を持つ。詩を歌い終えた釣り師に対して旅人が述べる感謝の言葉は、その意味を知るための好例となる。

> I thank you, good Master, for your good direction for fly-fishing, and for the sweet enjoyment of the pleasant day, which is so far spent without offence to God or man: and I thank you for the sweet close of your discourse with Mr. *Herberts* Verses, which I have heard, loved Angling; and I do the rather believe it, because he had a spirit sutable to Anglers, and to those Primitive Christians that you love, and have so much commended. (120)

旅人の発言においては、既に偉大な宗教詩人として認識されていたハーバートの人物像を経由して、釣り人の精神とキリスト者の精神とが結びつけられている。また、謙虚な態度で語られる旅人の台詞自体も、敬虔なキリスト者としての釣り人という像を読者に示唆する行為遂行的なものとなっている。さらに、最終章では、釣り師と旅人がしばしの別れを告げるとき、旅人（狩猟家）は "your company and discourse have been so useful and pleasant, that I may truly say, *I have only lived since I enjoyed them, and turned Angler*" (2nd ed., 353) と言う。ここで用いられる "turn" という動詞について詳しく論じたライトは、『釣魚大全』においてはそれが釣りの餌となる虫の変態を指す語でもあり、そのアナロジーで釣り師へと転身する旅人を表す語でもあり、さらに、釣り師の変化においては、キリスト教神学における内的回心としてのメタノイアが見られることから、ある種の信仰的態度を伴った改宗を経験している様子を示唆するものでもあることを論じている（146–51）。

釣り人と敬虔な宗教者が重ねられ、釣りの時間が瞑想的性格を帯びるようになったのは、初期近代イギリスにおける釣り言説の大きな特徴である。むろん、『釣魚大全』で釣り師が "in the Scripture, Angling is always taken in the best sense" (2nd ed., 55) と言っているように、人を釣る者としてのイエスや、漁師から使徒へと転身したヤコブやペテロなど、キリスト教において釣りは古い時代から特別な意味を持っている。しかし、初期近代においては、日常生活のなかで余暇の時間をいかに過ごすかという文脈で、釣りは一種のレクリエーションとしても捉えられていた。そして、『釣魚大全』の釣り師が、先の言葉に続けて "hunting may be sometimes to be so taken, yet it is but seldome to be so understood" (2nd ed., 55) と、釣りの価値を狩猟との対比関係で説明していることから分かる通り、信仰との親和性という美点は、他のレクリエーションよりも優れたものとして釣りを称揚するために、とりわけ重要な役割を果たしていた。『釣魚大全』の正式タイトルが『釣魚大全、あるいは瞑想的な人のレクリエーション』（*The Compleat Angler, or the Contemplative Man's Recreation*）であるように、17 世紀のレクリエーション流行下において、この作品そのものが、瞑想に適した行為としての釣りの価値を広めることを企図していたのである。[9]

---

[9] 飯田操の『釣りとイギリス人』は、イギリスにおける釣り文化の発展をクロノロジカルに論じている。特に、『釣魚大全』を含め、15 世紀末から 17 世紀頃にかけて、釣りが食糧確保という実利的目的から発展したことを示す資料をまとめた箇所として、18–92 頁を参照。

ウォットンの「岸辺にて」というテクストも、こうした時代状況の産物として読むことができるかもしれない。『釣魚大全』で、狩猟や鷹狩りを好む一部の人が、釣りを “a heavy, contemptible, dull recreation” (2nd ed., 5) だと揶揄する口調は、ウォットンが釣りを「無為の時間」と自嘲的に述べたのと重なる。そして、この種の否定的な意見に反論する根拠として、釣りを擁護する立場の者は、むしろ釣りの時間は退屈で無為であるからこそ瞑想の時間に相応しいという性質を挙げた。『釣魚大全』の釣り師は言う——

> . . . he that views the ancient Ecclesiastical Canons, shall find *Hunting* to be forbidden to Church-men, as being a toilsom, perplexing Recreation, and shall find *angling* allowed to *Clergy-men*, as being a harmlesse Recreation, that invites them to *contemplation* and *quietness*.
> (2nd ed., 55–56)

さらに第三版では “*God never did make a more calm, quiet, innocent recreation than Angling*” (118) という記述まで加えられる。ウォットンが釣りの時間を「無駄に費やされることのない無為の時間」と表現したのも、釣りに対する否定的な意見を戦略的に取り入れることで、価値の転覆を図ってのことではないか。少なくとも静寂と瞑想という二つの鍵語にかんしては、『釣魚大全』には彼が「静かに」（“quietly” 34）釣りをしていたという証言が、「ウォットン伝」には彼が作品執筆当時には礼拝式への参加や聖書の読解、私的な祈りを習慣的に行っていたという言質が残っている（c5v–c6r）。しかし、「岸辺にて」でウォットンが経験する時間が同時代の釣魚文化と無関係でないことを明らかにするために、以下ではひとまず伝記から離れて、テクストとそれを取り巻く言説との比較を試みたい。

『釣魚大全』では釣りが狩猟や鷹狩りなどの他のレクリエーションと比較されることでその価値が主張されているが、ウォットンの詩に登場するのは狩猟対象となる動物ではなく植物や小鳥であるため、そういった比較とは一見すると無縁のようにも思われる。しかし、レクリエーションという視点からこの詩を再読すると、この詩には初期近代イギリスで流行したレクリエーションのひとつ、フットボールの描写が書き込まれていることに気づかされる。前節では、恋愛の文脈において、体力と足腰を使うこの運動が、青年の若さを表すものとして機能しうると述べた。しかし、この詩においてフットボールが釣りに並んでもうひとつのレクリエーションとして描かれていることに拘って考えると、両者の間には複数のレベルでの対立関係が生じていることが分かる。16–17 世紀イギリスにおけるレクリエーションを階級の観点

から腑分けし、それらの特徴を概観したマルシア・ヴェール（Marcia Vale）によれば、この時代に釣りが上流階級の紳士たちに好まれるものとして地位を高めていった一方で、フットボールは下層階級が楽しむものであったという（52–55, 112–13）。階級格差は「岸辺にて」で描かれる世界にも存在している。フットボール青年を表す "*Swaine*" (line 17) という語が田園や農家の労働者を意味する（"Swain," def. 4）だけでなく、彼のもとへ駆け寄る乳搾り娘には "*Jone*" (line 15) という名前は田舎娘を指すステレオタイプのものであり（"Joan," def. 1）、彼女の仕事道具である手桶を修飾する "neat-rub'd" (line 15) という形容詞は、労働の痕跡を仄かしている。この点で、「岸辺にて」は、ウォットンの時代における釣りとフットボールという二種類のレクリエーション表象をいくらか反映したテクストとして読むことができる。

レクリエーション間の差異は、階級だけではなく、人物の精神に与えうる影響によっても生じていた。ヘンリー・ピーチャム（Henry Peacham）によるエンブレム・ブック『ブリタニアのミネルヴァ』（*Minerua Britanna*）に収録されたフットボールについてのエンブレム（fig. 1）は、このレクリエーションが象徴する心性を説いた一例である。

Fig. 1: Peacham's emblem of the country swains playing football in *Minerua Britanna*, 1612, 81. Accessed through the *EEBO* facsimile of an original in Harvard University Library [STC (2nd ed.) 19511.]

フットボールに興じる若者たちを表す “The country Swaines” (line 1) という表現からは、先に指摘した階級意識が確認できるが、それ以上にこのエンブレムが強調しているのは、次の詩行で端的に示されるような認識である。

> This worldly wealth, is tossed too and fro,
> At which like Brutes, each striues with might and maine,
> To get a kick . . . (lines 7–9)

ここでは、フットボールの球が「此の世的な富」と表現され、このレクリエーションに付与された世俗性に注意が向けられている。さらに、原文ではこの表現を解説する傍注が添えられており、ウァレリウス・マクシムス（Valerius Maximus）の「世に言う人間の力と富とは脆く儚いものであり、子どもの玩具のようなものである」（“Caduca hæc fragilia, puerilibusque consentanea crepundiis, quæ vires atque opes humanæ vocantur”）という格言が紹介されている。フットボールに対するこのような考えは、エンブレムのイコンも共有している。イコンでは画面の左右に三人ずつ若い男性が密集するように描かれており、中央の上部には球が浮いている。男性たちの視線はみなこの球に向けられ、我先に蹴ろうとして動かされた各人物の身体には、フットボールに内在する競争性と攻撃性が読み取られる。このような性質ゆえにエンブレムのテクストでは「獣」に喩えられる人物たちが行うレクリエーションは、ウァレリウスの言う「人間の力と富」を取り合う行為であるとみなされる。フットボールを戯画化したピーチャムは、その一方で、『紳士大全』（*The Compleat Gentleman*）では “I have taken so much delight in the Art of Angling that I may wel terme it the honest and patient mans Recreation” (251) と語っている。さらに、フットボールが世俗的な富の追求と関連づけられたのに対して、『釣魚大全』の最終章では、釣りによって得られる喜びは、金銭や領地などの富を多く保有することによって得られるものではなく、「私たちに花、驟雨、食欲、食物、満足、そして釣りに行く暇を与えてくださる」（“gives us flowers and showers and stomachs and meat and content and leasure to go a fishing” 5th ed., 267）神に感謝することで得られると述べられている。ウォットンの語る「無駄に費やされることのない無為の時間」という表現も、このような文脈に置けば、それが神によって用意された「暇」であるからだと考えることができる。

フットボールが世俗的な富への欲望として寓意化された一方で、釣りがその種の富とは無縁のものと考えられたことは、「岸辺にて」における二種類のレクリエーションの差異を説明するひとつの根拠になる。『釣魚大全』におい

て、釣り人は金銭的価値を優先しないと主張するウォルトンが、ウォットンを “that undervaluer of money” (32) という形容辞で紹介していることは、「岸辺にて」の語り手であるウォットンが理想的な釣り人であることの証左として理解できるだろう。[10] そうであれば、詩のなかで釣りをする語り手は、神に感謝しつつ瞑想的レクリエーションの時間を過ごす存在として捉えられなければならない。彼の座る岸辺という空間も、『釣魚大全』で釣り師が “the very sitting by the Rivers side, is not only the fittest place for, but will invite the Anglers to Contemplation” (16–17) と述べるような瞑想の場所としての意味をもつ。[11] この意味で、「ウォットン伝」で語られる釣りの時間は、『釣魚大全』で語られる「釣りに行く暇」と等価のものでもあり、「岸辺にて」の語り手は神の恵みに思いを馳せながら釣り糸を垂らす時間を経験しているのである。

ウォットンが経験した釣りの時間を十分に理解するためには、彼が具体的に何について瞑想していたのかを考えなければならない。「岸辺にて」を書いた頃のウォットンにとって、前節で取り上げた老いの問題は病に発展して、彼は死が目前に迫っていることを自覚していた。1638 年 2 月頃に書かれたと推定されるウォルトン宛の手紙に、ウォットンは「最近の病について、ある晩に書いた我が神への賛歌」(“A Hymn to My God in a Night of My Late Sickness”) と題した、以下のように始まる詩を付している。

> *Oh thou great Power*, in whom I move,
> For whom I *live*, to whom I *die*,
> Behold me through thy beams of *love*,
> Whilest on this *Couch* of *tears* I lye;
> And Cleanse my morbid *soul* within,
> By thy *Christs Bloud*, the *bath* of sin. (lines 1–6)

---

[10] この形容辞が、しばしば借金をしたウォットンの金銭感覚に対する無頓着のことを暗示しているという見解もある（曽村 194–95）。たしかに、そのような性格を穏健に皮肉る含意もあったかもしれないが、理想的な釣り人としてウォットンが紹介されている文脈を考えると、ここでは肯定的な意味でこの形容辞が用いられていると思われる。

[11] 古代から初期近代にかけての詩的伝統における川の意義を辿った W. H. ヘレンディーン（W. H. Herendeen）は “For poets of the sixteenth and seventeenth centuries, the river-crossed landscape continued to embody truth and to be a source of knowledge, as much as it had been for Greek, Roman, Jew, and early Christian” (125) と述べている。ウォットンの詩も部分的にはこうした伝統に沿っていると考えられるが、それに加えて釣り人にとっての川というさらに特別な意味が付与されている。

この詩が執筆された経緯は、ウォットンによれば、「毎日熱」（“quotidian fever”）に罹って自らの「寝室」（“chamber”）に閉じ込められた状態になり、一時は引いたものの、しばらくして「心気症と呼ばれる憂鬱症の発作」（“those splenetic vapours that are called *hypochondriacal*”）を伴って再発したため、気分を和らげようと賛歌を作ったというものである（Smith 2:376）。しかし、この詩作だけでは不十分であるとウォットンは続ける。憂鬱症の治療法について、彼は次のように述べる。

> . . . the cure is good company; and I desire no better Physician then your self. . . . since I have apparelled my best thoughts so lightly as in Verse, I hope I shall be pardond a second vanitie, if I communicate with such a friend as your self; to whom I with a chearfull spirit and a thankfull heart to value it as one of the greatest blessings of our good God . . . (Smith 2:376)

精神的病を治せるのは「良き友人」（“good company”）であると言ってウォルトンに会うことを望むこの文章は、二人の深い友情を示している。ここで重要なのは、二人を結びつけていたのが、釣りという共通のレクリエーションであったことである。ウォルトンに宛てた 1639 年 4 月頃の手紙で、ウォットンは「フライと浮きの時季」（“time of the fly and the cork” Smith 2:513）が近づいているから共に釣りをするのを楽しみにしているという誘いの言葉を記している。「岸辺にて」においてウォットンの隣で釣りをしているのがウォルトンであり、この詩が 1639 年に書かれたとすれば、病状が落ち着いて釣りをしているウォットンは、親友という神からの恵みに感謝をしつつ、憂鬱症の最上の治療法を享受していたに違いない。[12]

時間を操作する——ウォットンの詩作術

老いと病によって死が迫るのを感じながら、友と釣りをして神の恵みを瞑想することで精神を回復させる——このことがウォットンにとっての釣りの時間の意義ならば、それは「岸辺にて」にどのように表現されているのか。ひとつの特徴は、作品の自然描写のなかに見出せる。既に言及したように、詩では、樹液、蔓、鳥、川、木立、庭、花といった自然の風景が満載されている。これらは、一面においては、古代以来のパストラル詩で用いられてきたロクス・アモエヌスの文学トポスに則った修辞法であり、E. R. クルツィウスによって定式化された「うるわしい、日陰のある寸景」、「一本（もしくは

---

[12] ロバート・バートン（Robert Burton）の『メランコリーの解剖』（*The Anatomy of Melancholy*）では、既に初版において、釣りが憂鬱症を癒す効果をもつことが紹介されている（342）。

数本）の樹木、草地、泉もしくは小川」、「鳥のさえずりと草花」（281）といったモチーフと合致するものである。だが、「岸辺にて」は、これらのモチーフと並んで鱒という魚類を描くことで、このトポスの伝統から外れた破格となっている。詩における時間の問題という文脈で鱒を再考するとき、興味深いのは、この魚が比較的短命であるという生態学的特徴である。『釣魚大全』において、釣り師は、フランシス・ベイコン（Francis Bacon）の著作に触れつつ、鱒が「パーチや他の魚ほど長くは生きない」（“lives not so long as the *Pearch* and divers other fishes do” 89）と述べている。[13] 死を間近に感じていたウォットンにとって、鱒は、釣ることが難しい魚の代表例としてだけでなく、生の短さを思い出させる存在として、ナイチンゲールや花と同様、メメント・モリの道具の一種であったのかもしれない。

時間の長短を感じさせるウォットンの詩作術は、詩の最初の 14 行の構成にも見られる。1–12 行にかけて、詩人は釣りをしながら眺める自然風景をカタログ的に並べる。ここでの列挙は、ロクス・アモエヌスの文体的慣習であると同時に、実際には午後の一時に過ぎない時間を細分化して描写することで、幸福な釣りの時間を引き延ばしたいという欲望の表出でもある。このことは、続く二行と比較することでいっそう理解できる。

> The showers were short; the weather mild;
> The Morning fresh; the Evening smil’d. (lines 13–14)

春の典型的な気候を端的に表したこの詩行は、例えば『釣魚大全』で釣り師が “We’l sit whilst this showr falls to gently upon the teeming earth, and gives a sweeter smel to the lovely flowers that adorn the verdant Meadows” (62) と言って雨宿りをする場面のような、釣り人にとって日常的な光景を写したものでもある。しかし、この詩がインデントによって四つの部分に分割されていることを考えると、より重要なのは、最初の部分で 12 行に渡って丹念な細部の描写が続いた直後に、続く部分ではわずか 2 行で一日が過ぎる様子を詠い終えているという落差である。この顕著な違いは、釣りの時間の緩やかな時間を強調するものとも、それに対する現実の時間経過の速さを気づかせるものとも、どちらの役割を果たしているとも考えられる。

確実に言えるのは、ウォットンが「岸辺にて」を書くに際して、時間の流れに対する強い意識を向けていたということである。そして、このことは、

---

[13] ベイコンの『生と死の歴史』（*The Historie of Life and Death*）には、“Salmons are of a suddaine growth, but short liv’d, and also Trouts, but the Perch groeth slowly, and lives longer” 60）とある。

『ウォットン遺稿集』に収録された詩の本文と、『釣魚大全』に掲載されている詩の本文とを並置することによって、最も明確に認識できる。両者間の異同のうち、意味内容が変わるほどに異なっているのは、前者では "And now all *Nature* seem'd in *Love*" (line 1) とあるのに対して、後者では "This day dame Nature seem'd in love" (34; line 1) とある箇所である。[14] ここには二つの違いが見られる。第一に、前者は "all *Nature*" であるが、後者は "dame Nature" と、擬人化された女性としての自然の性質が目立ち、第二に、前者は "And now" と始まるが、後者は "This day" と、この詩行で描かれるのがある一日の出来事と設定されている。第一の点については、"all" という語に置き換えられることで、自然の万物が恋に落ちているかのような状態にあり、語り手のみがそれを享受できていないという、本論で先に指摘した内容を補強している。そして、第二の点については、後者の "This day" が時の一点を表す句である一方で、前者の "And now" はむしろ時の経過を表す句であるというのが重要な差異である。注目すべきことに、"And now" という表現は、この短い詩のなかで、この箇所を含めて三回にも渡って使われている（line 1, 15, 21）。『釣魚大全』版の詩を、ウォルトンはウォットンと釣りをしているときに直接読ませてもらったのか、あるいは別に読む機会があったのか、その真相は定かではないものの、後に『釣魚大全』に収録される本文をウォットンが修正して、それが後に『ウォットン遺稿集』に収録される自筆原稿となったはずである。だとすれば、ウォットンは、束の間の釣りの時を増幅させようとしながらも、時間は常に流れることをよりはっきりと示すための操作として、詩の本文の一部を書き換えたのだろう。

流れ続ける時間は、詩における生の儚さのモチーフが伝えるように、人を死へと導くものでもある。「ウォットン伝」によれば「12 月を 40 回生きるよりも 5 月を 5 回生きる」（"rather live five *May* months than forty *Decembers*" c6r）ことを望んだというウォットンは、皮肉なことに、ウォルトンと釣りに出かけ、「岸辺にて」を執筆したとされる年の 12 月に亡くなっている。だが、時間の経過はまた、冬から春へと季節を移り変わらせるものでもある。詩の冒頭では恋をしているような "all" (line 1) から除外されていたかに見えた語り手も、"Thus all look't *gay*, all full of *Chear*, / To welcome the *New-liveri'd yeare*" (lines 23–24) という二行連句で詩が締め括られるときには、春の訪れを飾る花々と共に、喜びの感情を分かち合っている。季節の巡りが釣り人に喜びを

[14] これら二つの版に加えて、さらに二つの別のマニュスクリプトについての本文の異同をまとめたものとして、Hannah 35 も参照。

与えることは、『釣魚大全』にてウォルトンが旅人に「私たちが出会ってから聴いたどの詩よりも優れた一篇」（“as choice a copy of Verses, as any we have heard since we met together” 229–30）であり「サー・ヘンリー・ウォットンの詩集に印刷されているうちの一篇で、間違いなく彼自身か釣りの愛好者によって作られたもの」（“a Copy printed amongst Sir *Henry Wottons* Verses, and doubtless made either by him, or by a lover of Angling” 239–40）であると言わせる詩「田園のレクリエーションの描写」においても描かれている。

> . . . Peace stil slu[m]ber, by these purling Fountains!
> Which we may every yeare
> Find when we come a fishing here. (lines 54–56)

この詩と「岸辺にて」に共通するのは、時の経過が希望へとつながることである。ゆえに、ウォットンにとっての「無駄に費やされることのない無為の時間」としての釣りの時間は、曽村が「ウォットン伝」の分析にて指摘したような政治性を帯びる以前に、語り手に老いを自覚させつつ釣り人に瞑想の機会を与え、来たるべき年への喜びを感じさせるものである。そしてこのことは、これまでに十分には行われてこなかった、『釣魚大全』をはじめとする同時代の資料との詳細な比較によって理解できる。

引用文献

Bacon, Francis. *The Historie of Life and Death with Observations Naturall and Experimentall for the Prolonging of Life*. London, 1638.

Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy*. Oxford, 1621.

Culler, Jonathan. *Theory of the Lyric*. Harvard UP, 2015.

Donne, John. “The Bait.” *The Complete Poems of John Donne*, edited by Robin Robbins, Routledge, 2013, pp. 132–37.

Hannah, John, editor. *Poems by Sir Henry Wotton, Sir Walter Raleigh, and Others*. William Pickering, 1845.

Herendeen, W. H. “The Rhetoric of Rivers: The River and the Pursuit of Knoweldge.” *Studies in Philology*, vol. 78, no. 2, Spring 1981, pp. 107–27.

“Jealous, *adj*.” *The Oxford English Dictionary*. Oxford UP, 2020, www.oed.com/view/Entry/100952.

"Joan, *n*." *The Oxford English Dictionary*. Oxford UP, 2020, www.oed.com/view/Entry/101392.

Maxwell Lyte, Henry. *A History of Eton College*. Macmillan, 1889.

Overbury, Thomas. *New and Choise Characters*. London, 1615.

Peacham, Henry. *Minerua Britanna*. London, 1612.

———. *The Compleat Gentleman*. London, 1634.

Smith, Logan Pearsall. *The Life and Letters of Sir Henry Wotton*. Clarendon P, 1966. 2 vols.

"Swain, *n*." *The Oxford English Dictionary*. Oxford UP, 2020, www.oed.com/view/Entry/195366.

Vale, Marcia. *The Gentleman's Recreations: Accomplishments and Pastimes of the English Gentleman 1580–1630*. D. S. Brewer, 1977.

Walton, Izaak. "The Life of Sir Henry Wotton." Henry Wotton, *Reliquiae Wottonianae*, London, 1651, b1r–c12v.

———. *The Compleat Angler or, the Contemplative Man's Recreation*. 1st ed., London, 1653.

———. *The Compleat Angler or, the Contemplative Man's Recreation*. 2nd ed., London, 1655.

———. *The Compleat Angler or, the Contemplative Man's Recreation*. 3rd ed., London, 1661.

———. *The Compleat Angler or, the Contemplative Man's Recreation*. 5th ed., London, 1676.

Walton, Izaak, and Charles Cotton. *The Compleat Angler*. Introduction by John Buchan, Oxford UP, 1960.

Ward, Adolphus William. *Sir Henry Wotton: A Biographical Sketch*. Archibald Constable, 1898.

Whitney, Isabella. "The Admonition by the Auctor, to All Yong Gentilwomen: And to Al Other Maids Being in Loue." *The Copy of a Letter, Lately Written in Meeter, by a Yonge Gentilwoman: To Her Vnconstant Louer*, London, 1567, A5v–A8v.

Wotton, Henry. "A Hymn to My God in a Night of My Late Sickness." *Reliquiae Wottonianae*, London, 1651, p. 515.

———. "On a *Banck* as I Sate a *Fishing*, A Description of the *Spring*." *Reliquiae*

Wottonianae, London, 1651, p. 524.

———. “A Description of the Countrey’s *Recreations*.” *Reliquiae Wottonianae*, London, 1651, pp. 531–33.

Wright, Myra E. *The Poetics of Angling in Early Modern England*. Routledge, 2019.

飯田操『釣りとイギリス人』平凡社、1995 年.

ウォルトン、アイザック『完訳　釣魚大全 I』飯田操訳、平凡社、1997 年.

クルツィウス、E. R. 『ヨーロッパ文学とラテン中世』南大路振一ほか訳、みすず書房、1971 年.

曽村充利『釣り師と文学　イギリス保守主義の源流―アイザック・ウォルトン研究』聖公会出版、2010 年.